

(研究ノート)

Helen Adam 千鳥足の魔女は笑う

高田宣子

20世紀半ばの米国社会に旋風を巻き起こしたサンフランシスコ・ルネッサンスとビート・ジェネレーション。その両方に影響を及ぼしたにもかかわらず、ヘレン・アダム（1909-1993）とその作品はさほど重視されずにきた。詩作品の一部は Donald Allen 編纂の *The New American Poetry 1945-1960*¹ に採録されたものの、1982年の新版 *The Postmoderns* では外され、その後20年近く個人詩集は出版されないまま、半ば伝説的な存在としてアダムは語り継がれてきた。² 最近ようやくその生涯と作品を辿る *A Helen Adam Reader*³ が出版され、バラッド詩人、コラージュ作家、劇作家、写真家、映像作家として活躍したユニークな存在は、再評価の時期を迎えている。

ヘレン・アダムはスコットランド南東部のピーブルズシャーに生まれ、14歳で初のバラッド集 *The Elfin Pedlar and Tales Told by Pixie Pool*⁴ を上梓。神童と呼ばれ、20才までに計3冊の詩集をイギリスで出版した。⁵ エディンバラ大学で学んだ後、雑誌記者としてロンドンで働くが、1939年、いとこの結婚式に参列するために母や妹とともに渡米。その後は第二次世界大戦の惨禍を避けるためニューヨーク、サンフランシスコへ移り住んだ。1954年、Robert Duncan 主催の詩のワークショップ参加を機に、サンフランシスコ・ルネッサンスの詩人やアーティストとの交流を深めてゆく。アダムの得意とする伝統を踏まえたバラッドは、頭で鑑賞する詩から本来

の肉声を取り戻そうとするビート詩人たちに大きな刺激を与えた。そしてアダム自身も彼らとの交流により、新たな表現方法を獲得してゆく。

Kristin Prevallet の評論 “Helen Adam’s Sweet Company”⁶には、アダムによるコラージュ写真が数点紹介されている。特に目を引くのは優美で冷然とした表情を浮かべる美女と爬虫類、両生類のコラージュだ。その艶めかしく怪異な空間と、彼女の残酷で超自然的なバラッド空間の共通点が評論では指摘されていて興味深い。確かに詩集 *Turn Again to Me and Other Poems* (1974)⁷の表紙にも、山犬の顔を持ち死者を導く古代エジプトの神アヌビスがデザインされ、乙女を後にして庭園に続く階段を降りるその光景には神秘的、オカルト的な儀式の雰囲気漂っている。神隠し伝説をモチーフとした物語歌「クマシデの迷路」⁸、死の影につきまといわれる旅人の幻想をテーマにした恋愛歌「さらば、異邦人」⁹、魔女や魔王が跋扈する魔界をモチーフにした戦歌「魔女騎行」¹⁰や祝歌「黄金岬の洞窟」。¹¹ 韻律を自在に操るその魔力により、ひとたび声に出せば、アダムのバラッドは呪文のように私たちの耳に吹き込まれてゆく。

だが、アダムの詩のテーマは伝統的なバラッドの範疇にはとどまらず、政治諷刺にも及ぶ。例えば核実験による環境破壊をテーマにした「辺獄の門」¹²には、キリスト復活による救済を待ち望んで辺獄の門に押し寄せる歴史上の英雄たちと「核 (atoms) の寝床に横たわる」不能男 Adam の臨終風景が描かれる。そこには 1950 年代以降、当時のソ連と競うように繰り返された米国の核ミサイル実験への批判が込められる。¹³ 最終連には R. カーソンの『沈黙の春』を思わせる未来の風景が広がり、生物の死滅した未来の楽園「エデン」は、永劫に復活することはない。音韻効果によりその寓意性をさらに増し、女アダムの黙示録は完結する。

Towers of atoms fall and rise

Where gigantic Adam lies.
Adam lies in Limbo Gate
Dwarfing night and day.
Eden's lark beside him sings.
No tomorrow lifts her wings.
Silence takes all living things.
Green waves, and golden spray.

ヘレン・アダムの詩作品にはビート世代への哀歌もある。たとえば波打ち際の酒場にスポットを当てた「ジェリコ・バー」¹⁴では、夜通し浮かれ騒ぐ連中の熱気と酔態の描写から逆に、それぞれの孤独の尋の深さが見えてくる。エレキギターをかき鳴らして「吠える」ジャンキーに、合わせて歌い踊る「ビートニクに一文無し、ホモにノン気」「ヒップスターにバクチ打ち」。波止場の酒場でそのトーンは「一人ぼっちの哀しみが / 終わりのない海のように / エレキギターを震わせる」と寂しげだ。作品中に繰り返される歌詞「母さん！」も聴き手に混ざる詩人の琴線に触れ、孤独感をかき立てている。詩人 Allen Ginsberg をかすかに意識しながら、アダムはひそかに母親への複雑な愛と祈りを込めたのだろうか。

だが、アダムの詩に現れる孤独には、悲壮感よりもむしろ爽快感が漂っていることも忘れてはいけないだろう。たとえば「風の中の歩み」¹⁵は、年老いてなお孤独と自由を愛する旅人を寿ぐ歌だが、詩人の息遣いと風の轟音は、冒頭行からの二重母音 [ou] と長母音 [ɔ:] を活かしたフレーズに鳴り響き、そのおぼつかない足取りは、詩行を短く取って右方向へ次々とインデントする形で視覚的に表される。

I am old, and

alone,

Blown by the wind along

the road leading

North.

北を目指してひたすら旅を続ける「あたし」は、「ああ なんというよろこび／老いて ただひとりとは！」と高らかに笑う。そこに見えるのは、サンフランシスコ・ルネッサンスにもビート・ジェネレーションにも属さない風漂の旅人、歩き歌い続ける吟遊詩人の姿だろう。求めるものは吹く風の中にも路上にもないことを達観した早すぎる遺言のような詩だが、そのトーンは力強い。ビートを語り消費する人々に遠景化され続けたアーティスト、ヘレン・アダム。詩人としての魅力は、そのしたたかで骨太な軽やかさにあるのではないか。

合図は

誰にも送らない。

でも 千鳥足で進みながら

あたしは高らかに笑う

極寒の夜に歯をくいしばり

あたしはゆく

はるか遠く。

そして崩おれる時

あたしの骨格は

なごりを

とどめず

骨は雪のひとひらとなり

路上に その道は続いてゆく

北へ

注

- 1 New York Grove Press, 1960.
- 2 音声資料としては、現在では動画サイト You Tube あるいは次のサイトを
を含め、ネット上で彼女の作品朗読の一部を無料で聴くことが可能。
http://www.archive.org/details/naropa_helen_adam
- 3 Kristen Prevallet ed., National Poetry Foundation, 2007.
- 4 London G.P. Putnam's Sons, 1923.
- 5 *Charms and Dreams from the Elfin Pedlar's Pack, 1924. Shadow of the Moon,*
1929.
- 6 *Lit [art] ure*, <http://www.heelstone.com/meridian/adam4.html>
- 7 Kulchur Foundation, 1977.
- 8 "In and Out of the Horn-Beam Maze," *Turn Again to Me*, pp. 9–10.
- 9 "Farewell, Stranger," *Selected Poems & Ballads*, p. 42.
- 10 "Witches Riding Song," *Turn Again to Me*, p. 81.
- 11 "The Cave of Golden Head," *ibid.*, p. 46.
- 12 "Limbo Gate," *Selected Poems & Ballads*, pp. 54–55.
- 13 コラージュ作品にも、米軍の W9 核砲弾実験（1953）の記録写真とスコット
ランド民族衣装を纏う（首から下の）男性を組み合わせたものがある。
- 14 "Jericho Jar," *Turn Again to Me and Other Poems*, pp. 99–101.
- 15 "A Walk in the Wind," *ibid.* pp. 115–116.